

生殖機能病態学

(旧・産科婦人科学講座)

山澤 功二，生水 真紀夫

教室の歴史は明治21年に設置された県立千葉病院において，初代教授長尾精一先生が婦嬰科司療医長を兼任，教室創立の第一歩が記されました。以来，今淵恒壽教授，後藤自助教授，後藤直教授，杉山文祐教授，岩津俊衛教授，御園生雄三教授，高見澤裕吉教授，関谷宗英教授そして生水真紀夫現教授へと引き継がれてきました。

「千葉大学医学部八十五年史」「千葉大学医学部百周年記念誌」より，歴代教授の人となりの一部をご紹介します。

後藤自助教授の仇名は風貌からして＜蝦蟇仙人＞で，性格は几帳面，講談全集音読を常とし，徒に新を好み奇を衒うようなことをせず，常に弟子を丁寧に指導するよう心掛けていたようです。後藤直教授は，30代の若さで年上の医局員が多数いるなかへ単身飛び込んできたにも関わらず，大学としての改革，新制すなわち臨床，講義，研究の基礎を一手にしかも短期間のうちに形作ったようです。

杉山教授は学問において一寸の誤りも許容しなかったとありますが，一方で胎状奇胎の研究は莫大な費用が必要となるにも拘らず，「君，学問だよ。費用がなんだ。しっかりやりたまえ！」とおっしゃったそうです。その若い医局員は感激の余り涙した，とも書かれています。

岩津教授は，コルポスコプを日本で始めて紹介した方で，名文家であるとともに，テニス，野球を通じ学生と親しみをもたれ，結果として多くの人材が入局したようです。

御園生雄三教授は俳号「岬風」とした俳人で，加賀谷凡秋門下，中村汀女同人であったようです。また，医学の究極の目的は「如何にして患者を傷つけることなく，より大なる効果をあげるか」であると期されていたようです。研究テーマは多数あったようですが，特に「子宮癌の診断・治療・並びに組織特異性（組織化学的研究）の問題」に重点を置いたようで，コルポスコプ・スミア・パンチバイオプシー（KSP）を外来患者の常用とし，日本における子宮癌研究のメッカとして一大発展をとげました。かたや俳句の精神のもと医局総出で，春はグラウンドでの花見，夏は房州での海水浴，秋は水郷，冬は亥鼻山の雪見，と四季を楽しむ風流があったようです。

高見澤教授，関谷教授は共にご健勝で，業績を述べるに留めます。

高見澤裕吉先生は昭和49年教授に就任。在任期間中の教職員は以下の通りでした。（敬称略）助教授；戸沢澄，高野登，小堀恒雄，工藤純孝，関谷宗英，岩崎秀昭，講師；大久保綜也，望月博，天神弘尊，河西十九三，前川岩夫，山内一弘，岩沢博司，掛田充克，赤峰正裕，稲葉憲之。またこの間，永田一郎（防衛医科大学校産婦人科教授），武田敏（教育学部基礎医学教授），阪口禎男（看護学部教授）が当教室から輩出しています。絨毛性疾患は高見澤教授のライフワークで，全国に先がけて絨毛性疾患登録制度を実施し，さらに絨毛癌の化学療法に多剤併用療法化学療法を導入しました。早くからヒトパピローマウイルス（HPV）の研究を始め，DNAプローブ研究会を発足させました。また癌・胎児・胎盤抗原の基礎的研究並びに腫瘍マーカーの開発，B型肝炎の母子感染予防の千葉大方式を確立されました。さらに数多くの学会，研究会を主催し，昭和55年第9回日本婦人科病理コルポスコピー学会，昭和56年子宮癌研究会，昭和60年第70回日本産科婦人科学会関東連合地方部会，昭和61年第4回絨毛性疾患研究会，昭和63年第9回子宮内膜症研究会，平成3年第32回日本臨床細胞学会総会，平成4年第44回日本産科婦人科学会総会，平成4年日本婦人科悪性腫瘍化学療法学会を主管するなど，常にリーダーシップを発揮されました。

前関谷宗英教授在任期間中は，平成6年に附属病院が特定機能病院となり，平成13年に医学部は千葉大学大学院医学薬学府へ，産科婦人科学は生殖機能病態学へ，平成16年には国立大学は独立行政法人化され，卒後研修制度も大きく変わるなど変革の時期でした。在任期間中の教職員は以下の通りでした。（敬称略）助教授；稲葉憲之，関克義，松井英雄，講師；杉田道夫，長田久夫。この間稲葉憲之（獨協医科大学産婦人科主任教授），矢野明彦（寄生虫学教授），白澤浩（第一微生物学教授），関克義（教育学部教授）が教室より輩出しています。また，在任期間中関谷教授の指導のもと計22名に医学博士学位が授与されました。自らは，附属助産婦学校長，附属図書館長，日本産科婦人科学会理事，婦人科腫瘍

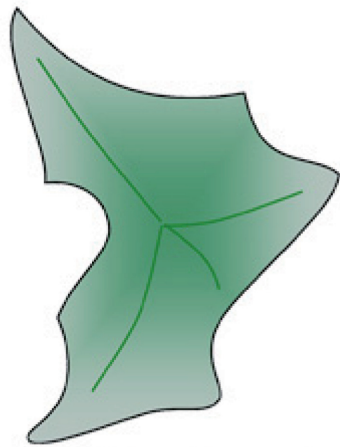
委員会委員長など多数の役職を歴任されました。研究面においては，子宮頸癌ではHPVによる子宮頸癌発生に関する基礎的研究，婦人科腫瘍における重粒子線治療，ヒトの絨毛がん培養細胞株を我国で初めて樹立，腫瘍血管新生因子（TAF）の抽出に成功，がん細胞の分化誘導療法など極めて先駆的な仕事を行われました。この間第90回および108回日本産科婦人科学会関東連合地方部会，第21回日本絨毛性疾患研究会を主催され，最終講義は「症例から学ぶ一卵巣がん」と題されて行われました。

平成17年には新進気鋭の生水真紀夫教授が第10代教授として金沢大学より就任されました。新たな出

発からはや5年が経過し，その間多少の混乱とともに種々の進歩，改革が進み，現在その成果が出つつあります。臨床面では産科救急対応システムの構築，婦人科悪性腫瘍手術における拡大手術の試みが特筆されます。研究面では，研究室，研究機器の整備が進みました。その結果，毎年多数の科学研究費を取得するようになりました。

平成22年には，千葉と葉脈をイメージした教室のロゴマークを作成しました。千葉大学として，商標登録（出願日：2010年11月8日 番号：商願2010-086732号）を行いました。

（やまざわ こうじ，しょうず まきお）



O/G @ Chiba-u Since 1874

2010年(平成22年)作成 教室のロゴマーク



2010年(平成22年)3月 スタッフ一同